

3. 整備コンセプト

風景と暮らしをつくる道の駅

伊豆半島のクロスポイントとなる天城湯ヶ島 IC（仮称）と道の駅の整備を一つの契機として、人口減少社会であっても、次世代へと引き継がれていく地域づくりを進めていきます。天城の山々、狩野川の清流等の地域の風景を最大限活かしつつ、地域経済、地域交流を活性化する新たな賑わいの風景を創出する、天城湯ヶ島の「風景と暮らしをつくる道の駅」を目指します。

①天城湯ヶ島の魅力を住民と来訪者が共有できる地域活性化プロジェクトの展開拠点づくり

来訪者への情報提供や休憩の場に加え、住民が天城湯ヶ島で暮らす魅力を再発見でき、外部に発信していく活動（ビジネス）を創出していける場づくりを目指します。そのため、周辺地域で今後展開していく狩野川の水辺や周辺の自然・農業体験や、文学の郷や温泉郷の回遊ツーリズム等の活性化プロジェクトの拠点としての道の駅となるよう、着地型体験観光機能や地場産品を活かした物販・飲食機能等を具現化する施設計画とします。また、近年の自転車人気や伊豆市が東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の自転車競技（トラックレース/マウンテンバイク）会場となったことなど自転車機運の高まりを受け、伊豆半島の広域サイクルイベントでの活用や、既存のサイクル拠点とあわせてサイクリストが気軽に立ち寄ることのできる場となるよう設備やサービスを整えます。

②地域住民の居場所となるコミュニティの拠点づくり

地域の人たちが日常的に利用し、子育て交流や多世代交流といったコミュニティの拠点となる場づくりを目指します。狩野川を望みながらくつろいだり子供を遊ばせたりできる水際公園や、家族や友人との食事や茶話会、また地域の会合や料理教室などを行える施設計画とします。また、地域住民の買い物環境を支える場となることも目指します。

③地形や周辺に馴染む道の駅の佇まいの実現

狩野川に向かって緩やかに下る既存の地形構造を活かし、駐車場から建築物、狩野川までの空間が自然風景と調和した道の駅をつくります。これは同時に、国道 414 号沿いの既存建物の生活環境の維持や川へのアプローチの高低差の解消、地盤の安定性の確保にも繋がります。また、建物も地域で使いこなすことができる適切な規模とし、周囲の建物のボリューム感に馴染む佇まいとします。駐車場等を整備する道路管理者や、狩野川を管理する河川管理者等と密接に連携しながら、道の駅全体として一体感のある空間を実現します。

④視覚的・空間的な狩野川の清流との繋がり創出

狩野川は、清らかな流れで地域の生活と風景を支えてきただけでなく、ワサビ栽培やアユの友釣りといった地域の文化も育ててきた重要な景観資源です。狩野川に隣接して整備される本道の駅では、テラスや水際公園、川に対して解放感のある設えとすること等によって、川との視覚的な繋がりを創出すると共に、狩野川との一体感を重視した施設計画とし、周辺のアクティビティとの連携を目指します。全国でも類を見ない川の魅力を活かした造りは、本道の駅の最大の特長として、多くの人を惹きつけます。

□「天城湯ヶ島 IC（仮称）周辺将来ビジョン」に係る中間報告（案）を踏まえたコンセプトづくり

(1) 天城湯ヶ島地区～伊豆半島南西部の玄関口として、伊豆市をはじめ伊豆半島の観光情報発信拠点、非日常を味わえる農業などの着地型体験観光機能、地産地消の飲食機能や地場農水産物の物販機能など、訪れた人をおもてなしする場づくりを目指す

→①天城湯ヶ島の魅力を住民と来訪者が共有できる活性化プロジェクトの展開拠点づくり

(2) 地域の人たちが日常的に使い、子育て交流や多世代交流場といったコミュニティの拠点、さらには雇用を生むことで、地元で愛される場づくりを目指す

→①天城湯ヶ島の魅力を住民と来訪者が共有できる活性化プロジェクトの展開拠点づくり

→②地域住民の居場所となるコミュニティの拠点づくり

→⑤利用の変化に対応できる空間の柔軟性の確保

→⑥地域の人材の活用と次世代の育成、技術の継承に寄与する仕組みの構築

(3) 狩野川の自然や景観を活かし、地域住民、観光客双方のレクリエーションや憩いの場になるような環境づくりを目指す

→③地形や周辺に馴染む道の駅の佇まいの実現

→④視覚的・空間的な狩野川の清流との繋がり創出

(4) 伊豆半島中央に位置する広域道路網の結節点という立地、天城北道路という高規格幹線道路を活かした防災拠点づくりを目指す

→⑦防災拠点としての性能・設えの確保

⑤利用の変化に対応できる空間の柔軟性の確保

いつも利用者に溢れている空間は、更なる利用者と呼び込みます。平日/休日、日中/夜間といった時間帯に応じて空間のタイムシェアリングを行うことで、限られたスペースを密度高く利活用することのできる空間づくりを行います。道路管理者等との連携を密に行い、提供するサービスや利用の面でも一体性と柔軟性を確保します。また、担い手・地域産業の成長にあわせ、臨機応変にその使い方を変えていくことのできるよう、空間の自由度の高い構造とし、中長期的な空間の可変性も担保した施設計画とします。

⑥地域の人材の活用と次世代の育成、技術の継承に寄与する仕組みの構築

道の駅の施設運営や施設を利用した活動に対し、様々な知恵とノウハウを持つ地域の人材が直接関与を続けられる仕組みを構築することで、次世代を担う地域の人材の育成と持続可能な地域活性化を後押しします。また、地場の素材や工法・技法の採用等により、地域の林業・建設業等の産業が、整備後も建物の維持管理にも関わり続けることのできる施設計画とします。

⑦防災拠点としての性能・設えの確保

十分な構造性能、耐久性の高い材料選定等によって、災害時にも安全で安心な施設とします。狩野川に近い立地を活かした自然通風をはじめ、自然採光などの自然エネルギーの活用を検討し、災害に対する柔軟性を確保します。また、防災倉庫に帰宅困難者の備蓄を設ける等、高規格幹線道路を活かした防災拠点に必要な機能の検討をすることで、周辺の防災機能との連携を目指します。大規模災害時には、道路啓開の拠点や緊急物資の供給拠点等として、また、国道 414 号（天城峠区間）、国道 136 号（船原峠区間）に近いことから、積雪・降雨時の待機場所としての活用も検討し、道路への放置車両等の軽減に寄与します。